社会福祉法人 恩賜財団
東京都同胞援護会
TOKYOTO・DOHO・ENGOKAI

同援だより

2017年　新春号（178号）
http://www.doen.jp/

新年のご挨拶

理事長　牧野洋一

明けましておめでとうございます。新年を迎え、皆様のご健勝を心よりお喜び申し上げます。

本年も、法人及び各施設の運営に当たり、各別のご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

おかげさまをもちまして、昨年も、当法人の経営する施設におきましては、各別の事故もなく、利用者の皆様方に満足いただけるサービスをご提供できたと思うところです。これも、役職員一丸となって利用者サービスの充実に取り組んだ結果であり、また、日頃からの皆様方の当法人事業への深いご理解と温かいご支援の賜物であると、深く感謝申し上げる次第でございます。

改正社会福祉法が昨年三月に公布され、今年四月より本格的に施行されます。それに備え、当法人としては、評議員会を議決機関とし、新たに会計監査人を設置するなどの定款の大幅改正を行うとともに、六月までに、法人の内部留保（社会福祉充実残額）について、その活用方法を盛り込んだ「社会福祉充実計画」が求められるなど、新たな体制のもとでより厳しい法人運営を迫られております。当法人といたしましては、役職員一丸となって、この難局を乗り越えていく覚悟でございます。

さて、今年五月に、「昭和郷高齢者複合施設」が開設する予定です。この施設は、①サービス付き高齢者向け住宅「さくらガーデン」②グループホーム「かえで」③「昭和郷小規模多機能居宅介護センター」④定期巡回・随時対応型訪問介護看護サービスを提供する「昭和郷訪問介護センター」⑤「昭和郷指定居宅介護支援事業所」及び⑥「地域交流スペース」などで構成されています。開設後は、昭島病院を始めとする昭和郷内各施設や市内各事業所と連携し、「地域包括ケアシステム」の発展に取り組んでまいります。

今年も引き続き、利用者の皆様へ良質なサービスの提供に努めるとともに、当法人の各施設が地域の皆様にとって掛替えのない存在となるよう一層の努力を積み重ねてまいる所存でございます。

本年もよろしくお願い申し上げます。

海外研修

原町グループホーム
主任 生活相談員　山脇 啓子

去る平成二十八年七月六日（水）～七月十三日（水）の一週間、海外研修に行く機会をいただきました。

訪問国はオーストリア、ドイツでした。どちらの国も国名をきいても福祉と結びつかず、オーストリア、ドイツの社会福祉制度について何の知識もなく、このまま行っても大丈夫なのかと不安を感じていました。

しかし、出発前のオリエンテーションの中でオーストリアとドイツの保険制度について、両国は隣国であるものの制度に違いがあること、また、日本との共通点（高齢化が進んでいること、介護人材不足など）を学ぶことができました。これにより、後日施設を視察した際の説明が自分にとって解りやすいものとなりました。

研修の中では観光もさせていただき、観光を通して二つの国の歴史や文化に触れる事もでき、充実した日々となりました。

オーストリアでは「ハウス・ヴィーデン」「ハウス・レオポルド」という二つの施設を訪問しました。ウィーンの中心部と郊外にある同系列の施設でした。

ウィーンの施設は日本でいうケアハウスのような印象を受けました。

できる限り自分のことは自分でできるように援助すること、その為に必要以上に手を出しすぎないこと、様々なボランティアが登録され、ボランティアもケアを提供する要員に組み込まれていること、施設内で毎日様々なプログラムが用意され施設の外の生活と変わらないことなど沢山の話を聞くことができました。

日本と同様に高齢化が進み、また、他国からの労働者が自国に帰らずオーストリアに定住する事によって生じた多様化した文化に対応していくことが必要という話を聞き、陸続きの大陸ならではの課題があるのだと感じました。

ドイツではミュンヘンにある「シニアセンター・マルタマリア」「カリタス・アルテンハイム・サンミッシェル」という二つの施設と、「フォン シュリーベン」という福祉機器店を訪問しました。

「シニアセンター・マルタマリア」は太陽光が射し込み、とても明るい施設でした。

認知症状のある方のフロアは一般の玄関に出られないようになっていましたが、部屋からとフロアの外にある出入り口から庭に出ることができ、庭の管理を自分達でしているとのことでした。

また、外に出られたり、庭でティーパーティをすることもあったりと閉塞感は感じられませんでした。

日本から来た私たち一行を利用者の皆さんが興味を持って話しかけてくださったり握手を求めてくださったり、一緒に歩いてみたりと笑顔が絶えず、落ち着いている印象を受けました。それはつまり、職員のケア、環境が利用者の皆さんに合っているということなのではないかと思いました。

「カリタス・アルテンハイム・サンミッシェル」は、自分の家のような感じでした。

見せていただいた部屋は家族や飼っていた犬の写真で飾られ、使い慣れた家具が置かれてとても素敵な空間になっていました。

礼拝堂で行われるミサや礼拝には地域の方もいらっしゃったり、食堂をレストランのように利用することが可能だったりと施設の一部は地域の皆さんに開放されていました。それは地域の方はいずれこの施設を利用する対象者となることがあるという面から、今から施設の事を知っていてほしいという考えからとの事でした。

また、地域の方が施設について知り、施設の名刺を持った入居者が外に出て戻れなくなった時に声をかけ施設に一緒に戻る関係を作っていると言っていましたが、自施設でもそのような関係を地域の方と作りたいと思いました。

今回、この研修では初めての試みとなる福祉機器店の見学がありました。お店は百貨店の中ではなく、商店街のようにお店が並んでいる中に普通にありました。日本では見たことがないような用具もあり、興味深くとても参考になりました。

四ヶ所の施設を見学しましたが、どこも人手不足で他国からの労働者が多くいるという事でした。介護の仕事に携わる人の給料が少ないことが問題視されているため、国をあげて改善されるよう対応し始めたという話を聞きました。

出発前日のオリエンテーションで聞いた事ではありましたが実際に現地で話を聞き、国や制度に違いはありますが、取り組まなくてはならない問題は同じであることを感じました。

施設に入所しても社会的な結び付きを切らないようにする事、食事は楽しみのひとつなので満足してもらえるように工夫する事、個人の意見を尊重する事等、基本的な考え方は同じということを実感した研修でした。

最後になりますが、このような貴重な研修の機会を与えてくださった同胞援護会の皆様、そして快く送り出してくれた職員の皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

熊本地震復興支援活動報告

ゆたか苑
機能訓練指導員　小林 弘之

この度、熊本地震による人的支援のお話を頂き、私は熊本県益城町にある特別養護老人ホーム「いこいの里」に隣接されている、福祉避難所への支援に行って参りました。

期間は、八月二十五日から八月三十一日までの約一週間でした。その一週間という期間の中で、自分に何が出来るのか、また機能訓練士として何を行うべきなのかを出発までの間、自問自答し悩んでいました。

熊本地震が起こった四月十六日、緊急速報が流れ、今回の大震災を知りました。「また大地震…。今度は熊本か…。」と、やりきれない思いで、連日流れてくる震災のニュースを見ていました。

そんな状況の中、私は八月二十五日の夕方に熊本空港に到着し、タクシーで避難所へ向かいました。震源地である益城町に入ると景色は一変し、崩壊したままの家々や大きく割れたままの道路など、大震災の爪痕が大きく残っていました。まるで、「あの日」から時間が止まっているようでした。

福祉避難所には、九名の方が未だに不自由な生活を強いられていました。まず目に飛び込んできたのは、狭いスペースの中に作られた段ボールの寝床でした。隣とのスペースも段ボール一枚で仕切られた程度の作りで、心身ともに窮屈な思いをしている事はすぐに感じとれました。日々の支援内容としては、朝食の準備から始まり、体操やマッサージ・ストレッチを午前と午後に分けて行ったり、みんなで外へ散歩に行ったりして、たくさんの時間を避難されている方と一緒に過ごしました。段ボールの上に乗り、マッサージを行いましたが、その寝床の硬さに衝撃を受けたことを今でも覚えています。

特別な事は出来ないけれど「寄り添う」ことだけは出来るはずだと思い、出来る限りの支援をさせて頂きました。劣悪な環境、先の見えない不安、共同生活でのストレス。震災から四カ月が経ち、避難所内で生活を共にする中で、まずは「心の復興」が最優先だと感じました。

避難されている方から、「苦しい時こそ笑わんといかんよ。」と言われた言葉が、今でも自分の胸に響いています。

最後になりますが、今尚、苦しい生活を強いられていらっしゃる熊本の方々、そして今回出会った熊本のお父さんとお母さん達に、これから沢山の夢と希望が降り注ぎますように心から願っています。

ゆたか苑
介護職員　白瀬 築

四月十六日未明に発生した熊本地震。そこから約四か月間が経ち、少しずつ熊本地震の事を忘れかけていた八月中旬。施設長から熊本への人的支援のお話しをいただきました。

行先は熊本県益城町特別養護老人ホーム「いこいの里」。期間は八月二十五日～八月三十一日、注意事項とおおまかなスケジュールの書かれた紙を受け取り、私は四か月も経って今更何があるのだろう？支援物資もボランティアも足りていて、私一人派遣されたところで何も変わらないのではないかと考えたのが正直なところでした。しかし、その考えはこの一週間を通じ大きく反省することとなりました。

施設は定員六十名。華・翔・空・緑・香・彩と十名ずつ六つのユニットに分かれております。そこに定員を超えて避難入所している方がいます。他にも施設内に福祉避難所と県から認定されている避難所があり、高齢者の方々九名が避難生活を送っているという状態でした。その中で一週間、八時～十七時まで人手の足りないユニットにその都度入り、通常業務を行うことの他に福祉避難所で避難生活を行っている方々のサポートをお願いされました。

一日の流れとしては六時半～福祉避難所に行き朝食、八時～十七時介護現場に入り、終わり次第福祉避難所で夕食をとって一日が終わりです。食事は毎食福祉避難所で生活をしている方々と準備して一緒に食べます。この食事を通し避難生活を送っていた九名の方々から様々な事を学び、帰る頃には別れを惜しみ涙が溢れる大切な時間となりました。この縁は

私自身を大きく成長させてくれるものとなりました。

介護現場では職員の皆様はとても笑顔が多く地震があった事を感じさせない環境でした。地震当初は職員自身も被災されている中で、施設の駐車場で寝泊まりし毎日休みなしで働き続けてきたと聞きました。その後地震の影響から職員がどんどんと辞めていってしまい現在に至るとの事でした。それにより普段の通常業務や夜勤まで事務所の方々も手伝い、施設長自ら、現場にでてレクリエーションをやる等、出来る限り利用者の為にやろうという姿勢が強くみられました。この姿勢を目の当たりにし、強く感銘をうけました。

最後になりますが、益城町という町単位でもあることから、施設を利用している人たちはほとんどが知り合いだそうです。地震の際もどこどこの誰がいない等すぐに対応ができたとのことでしたが、核家族化が進む東京では難しい事だと感じました。地震はいつ来るかわかりません。どのような形で地震が発生しても大丈夫なように対策が必要と改めて考えさせられました。

さやま園
主任 生活支援員　**茂木 貴之**

「地震があったようですが大丈夫ですか？」「こちらは大丈夫です。」「台風が接近しているようです。気をつけて下さい。」「心配いただきありがとうございます。」これは、障害者支援施設「三気の里」の職員とのＬＩＮＥでのやり取りです。七月に熊本に行って以来、熊本の天気やニュースなど確認することが日課となり、何かある度にそんなやり取りが今も続いています。

七月三日から一週間、熊本地震復興支援活動に参加してきました。活動内容は、地震の被害が大きかった益城町の近隣にある「三気の里」に通所している利用者の送迎でした。通常なら車で三十分位の道のりですが、阿蘇大橋の崩落やトンネルが破損したことで峠道を迂回してのコースで往復六十三キロ。約二時間の道のりを朝夕行うというものでした。

この時期の熊本は雨続きで、地震で地盤が緩んでいます。雨が降ると土砂崩れの危険や峠道は濃霧が発生し、五メートル先は見えない状況となっています。

時間の合間に益城町や熊本城などを訪ねました。地震から三ヶ月近く経っていましたが、ほとんど手つかずの状態で、その原因は、住宅地の道が狭くトラックなどの大型車が入れないことや梅雨時期で作業が進まないことのようです。応急処置として一部破損や半壊した家などは雨の侵入を防ぐ対策をとっており、屋根をブルーシートで覆われている家が点在していました。

「三気の里」自体も地震の影響があり、ライフラインが途絶え、入所している利用者はグラウンドに並べた十数台の車に分れて毛布にくるまり、絶えず襲ってくる余震に恐怖を感じ、不安な一夜を過ごしたそうです。

十月十四日の読売新聞に壊れた自宅の解体が進まず、住宅再建のめどが立たず、復興への展望が持てないと被災した方の半数以上が感じているとありました。阿蘇大橋の代替路は開通に向けてようやく作業が進められ、ＪＲ豊肥線の肥後大津―阿蘇駅間は今も復旧の見通しが立っていないようです。熊本城の修復も二十年かかるとも言われています。地震から半年が経ちましたが復興はまだまだといったところです。

今回、とても印象に残っているのは熊本の人の温かさでした。被災して大変にもかかわらず、復興支援に行った私たちを気遣ってくれました。だからこそ、今も繋がりがあるのだと思います。今後も熊本の復興を見守っていきたいと思います。

昭和郷合同防災訓練報告

訓練概要

昭和郷合同防災訓練が九月二十四日土曜日に実施されました。

朝十時に震度六の地震が発生し、その後、ライトホームから出火という想定で訓練を開始しました。

当日は、昭和郷近隣の十ヵ所の自治会をまとめた昭島市第四ブロックの地域住民の皆さん五十九名。昭和郷の施設からは、施設内待機も含めて八百二十七名。総勢八百八十六名の参加がありました。

また、昭島消防署、昭島警察署にもご参加、ご協力頂きました。

訓練状況

訓練状況として、地震発生後、第四ブロックに昭和郷から応援を要請。ブロック長が各自治会の委員に対し昭和郷に災害発生のため応援に行くよう電話で指示。

十分ほどで、各自治会が自治会名の入った幟を掲げて応援に駆けつけて下さいました。

その後、地震でケガをした利用者をいくつかの施設からトリアージエリアに搬送する訓練は、職員と自治会の皆さんで一緒に行いました。

次々と担架や車椅子でケガ人が震災対策本部横のトリアージエリアに搬送されて来ます。

搬送されたケガ人は、昭島病院の看護師によりトリアージされ、病院まで運ばれました。

トリアージ

Triage(トリアージ)は、Treatment(治療)、Transport(搬送)と共に、災害現場で最も重要な三つのTの一つであり、救急医療や災害医療において欠くことのできないものです。

大規模災害など多数の傷病者が発生した際の救命の順序を決めるため、標準化が図られています。

実際には、軽症患者から治療しても助からない人を四つの類型に分け、どの類型にトリアージしたか一目で分かるように、専用のタグを手か足に付けます。阪神淡路大震災を教訓に日本でも浸透してきたため、昭島病院も行っていましたが、合同防災訓練では初めての実施となりました。

今回の訓練も決められたルールにしたがって病院の看護師がトリアージを行いました。

消火訓練

さて、地震後出火したライトホームは自衛消防隊では消火できず、昭島消防隊が消火する想定で訓練を進めました。

こちらも自治会の応援を頂きました。

消火訓練は、水が充填された訓練用消火器を使用し、「火事だ！ 火を消せ！」と大声で周りに火事を知らせながら行われました。

合同訓練の目的

私共福祉施設は、毎月、避難や消火、地震の訓練を行っています。

協力して下さったそれぞれの自治会も防災訓練を積まれています。

しかし、このような訓練と実際の災害発生時とでは被害状況や災害の発生時刻、天候などで、協力できる範囲や体制などが大きく異なることもあります。

さらには、消防署と警察署も手が回らない状況になると考えるべきです。

災害時は、自助・共助・公助の順です。

今回の訓練の大きな目的は、「共助」が実践できる顔の見える関係を作ること、昭和郷の施設、建物、そこで暮らす利用者を知って頂くことだったと思います。

そういう意味で今回の合同訓練はとても有意義に終わりました。

今後は、こちらからも地域自治会の防災訓練を見学させて頂くなどして、いざというときにお互いが助け合える関係を作って行きたいと考えています。

第四ブロックの地域住民の皆様には、今年も訓練参加を大変協力的にして下さったこと、あらためて感謝申し上げます。

（昭和郷郷長 記）

同援こども学習室

サンライズ万世
所長　田代秀之

同援こども学習室（通称・ラスク）は、経済的に学習塾等に通うことが困難なこどもの学習支援を、無料で提供することで開始されました。

昨今、児童虐待件数の増加が大きな社会問題となり、同様に「貧困の連鎖」を断ち切ることの重要性も叫ばれております。私たちは、未来ある子どもたちにとって何らかの支えになれるよう、微力ではありますが関係機関と連携し活動しています。

平成二十七年度の事業開始当初から学習力向上を図る以外に解決課題が多岐に渡っている事に気付かされました。例えば、発達障害の児童や引きこもり・不登校児童の居場所が無い事、三度の食事が摂れていない児童や不衛生状態にある児童の健康管理など、他にも様々な生活課題を垣間見ることとなりました。

昨年度の活動では、学習面と居場所作りで一応の成果があったと評価できます。一方、〝食事の提供〟を如何に支援して行くかが喫緊の課題として残され、この事業が担う重要な役割を認識させられた一年となりました。

平成二十八年度に入り二年目の〝ラスク〟は児童女性グループの事業として位置付けられ、NPO法人キッズドアを中心に、ボランティアや関係機関等、たくさんの方々のお力添えをいただきながら事故も無く支援を継続しています。

昨年度は小学四年生から中学三年生まで全学年で登録があり、男女比のバランスも良く、「ラスクは雰囲気がとても良い」とボランティアの声も聞かれました。ここで昨年との違いをいくつかご報告させていただきます。

平成二十八年十月現在、十五名の登録中十一名が中学生。内五名が受験生です。夏以降は当初予定より二時間前倒しで学習会を開始し、受験対策を手厚くしています。因みに、昨年度は一名の受験生が希望の高校へ進学することが出来ました。今年度はこの五名がそれぞれ希望する高校への進学を目指し個別学習に励んでいます。

午前中の学習を終えると、ボランティアと共に昭島荘の食堂に行きます。昭島荘の利用者と触れ合い、気心の知れた学生ボランティアと皆で食卓を囲み「いただきます」の元気な掛け声で食事を食べる子ども達の様子は、温かい家庭の食卓を感じます。「食事の提供は、単に食生活改善を満たすだけではなく、協調性やマナー、社会の一員として感謝する気持ちの大切さを学ぶ良い機会にもなっている。」とボランティアからの報告があります。

そして、十二月十一日はクリスマス会を予定しています。ボランティアと子ども達が思いを持ち寄り、思い出に残るクリスマスを演出して参ります。

このような活動が出来るようになったのは、地域福祉に尽力されている「東京昭島ロータリークラブ」様のご支援によるものです。学習教材の購入、行事企画など、予定外の計画立案が可能となりました。

この場をお借りし、東京昭島ロータリークラブのご支援に改めて感謝申し上げます。

これからも、同援こども学習室は状況の変化に柔軟な対応で支援を継続し、より地域との関係を深めながらその輪を広げる様努めて参ります。皆様の温かいご理解とご支援をどうぞ宜しくお願い申し上げます。

しせつ通信

◆大山保育園◆

以前から年に数回五歳児が老人施設にて交流をしていましたが、園の近くに大規模複合型介護老人施設が出来、声を掛けたところ「是非」との事だったので、二カ月に一度交流しています。施設内のスペースに、通所や入所のおじいちゃんやおばあちゃん方が集まって来てくれ、歌を発表したり、一緒に手遊びを行ったり、運動会後には和太鼓も披露してきました。その後は、集まって頂いた方達全員と握手をして触れ合います。初めて訪問した時は、場所や雰囲気もありますが、おじいちゃんやおばあちゃん方に慣れずに、とても緊張をする姿や不安そうな姿ばかりで「こわい」との声も聞かれました。自分の祖父母と関わる事があっても、他の方達と触れ合う事がない子ども達が多いので、不安になったのかもしれません。握手をする時も自分からなかなか手を出せませんでした。行く度に温かく、そしてとても楽しみに迎えてくれる、おじいちゃんやおばあちゃん方に少しずつ慣れていき、今では「運動会で頑張った太鼓を見てもらおう」「かっこ良い所を見せよう」と張り切る子ども達の姿も見られます。握手をする時は自分から近くに行き、話し掛ける姿も見られています。おじいちゃんやおばあちゃん方も、とても嬉しそうに拍手をしながら見てくれたり、手を握ったら離さずに話をしたり、涙を流して喜んでくれる方もいます。施設からは沢山の方に交流してもらいたいと、今では二カ所で行う事もあります。交流する事で、お互いに心が通じる姿が見られ、子ども達の成長も少しずつ感じています。

今後も、このような地域との関わりを大事にして継続していくと共に、子ども達が自然に関わっていけるような機会を園内でも考えていきたいと思います。

（高橋　記）

◆昭島荘◆

昭島荘では、利用者の方々の重度・高齢化に伴い、創意工夫して皆さんが無理のない形で参加できる様々なイベントを考え、年間を通し行っています。中でも利用者の皆さんに好評なのが、一日外出とサマーコンサートです。

その中で、今回は過日行われたサマーコンサートをご紹介したいと思います。

今までも様々なコンサートを開催して参りましたが、今回は利用者の皆さんの「本物のアーティストが観たい！」との要望に応えようと大奮発！ラッツ&スターのトランペット奏者であり、お笑いタレントでもある、桑野信義さんをお呼びすることになりました。

場所は昭島市内にあるフォレスト・イン昭和館。待ち焦がれたコンサートが開演！　颯爽と登場した桑野さんの楽しいトークと絶妙なギャグに皆さん大爆笑。そして、素晴らしいトランペットの生演奏！　生のトランペットの音色の迫力と美しさに、皆さんびっくり。演奏に聴き入っているうちにあっという間に時は過ぎてしまいました。利用者の皆さんからは、「演奏が素敵だった！」「やっぱり生の音は違うね！」「迫力があって楽しかった！」等、大好評のコンサートとなりました。演奏の後はもちろんホテルの美味しいコース

同援俳壇

万世敬老園　あじさい句会

盛りなる
小菊の路地に　香り立つ
転びても
泣かずに走る　運動会
月岡　久三

青空に
柿のみひとつ　のこりけり
思い出よ
林檎の皮を　ほして喰べ
赤松ハツエ

枕頭（ちんとう）に
薬とともに　林檎おく
ふるさとの
のきにならびし　つるし柿
河田　文江

若者は
丸ごと林檎　かじりおり
朝寒に
起きるつらさに　寡じおり
平岩　武二

料理に利用者と職員が互いに親睦を楽しみながら舌鼓を打ちました。今後も、利用者の皆さんがどうしたら楽しいひとときを過ごせるのかを探求しつつ、より一層利用者の皆さんの支援に励んでいきたいと思います。

（見崎　記）

◆小茂根福祉園◆

小茂根福祉園のスタジオ ウーフ（就労継続B型）では、平成二十四年度に清掃作業「チリトリ TiLi-tori」を立ち上げました。

最初の参加利用者は、平成二十三年度から一年間研修を受け、用具の使い方や手順といった専門的な技術を覚えました。現在まで延べ十一名の方が研修を受け終えています。そして、これまでの約四年間、豊島区にある当法人の特別養護老人ホーム「ゆたか苑」にて清掃を請け負っています。

清掃をしていると、「ゆたか苑」にいらっしゃる利用者のみなさまに「いつもありがとうね」や「大変だね」、「きれいになったね」と声をかけていただけることがあります。メンバーがそれに、嬉しそうな表情で照れながら答える様子は、とても新鮮さを覚えるとともに、これがモチベーションや満足度につながっているのだと感じます。

清掃作業チリトリは、法人の規模の大きさを活かし、貴重な施設外就労の場として、また、利用者の活躍の場として、大いに参加利用者の満足を得ながら今日まで進んできました。

就職の難しいとされる重度の知的障害がある方でも、施設内では味わうことのできない緊張感や達成感を持って働ける場所は貴重です。

ただ、一方で清掃作業は即座に顧客に直接結果が見えてしまう作業特性を持っています。故に予測されるトラブルは尽きません。確かに支援者の労力は大きなものですが、利用者が得られる達成感といった満足度は高く、それは寄り添う支援員にとってもやりがいになっています。

地域で暮らす障害のある方が、このように社会に出て活躍する場は、今後もますます求められていきます。

働く利用者を近くで支えながら、様々な形で、様々な業種で、様々な場所で障害者の就労機会が増えていくことを目指さなければいけないと、改めて襟を正す思いで支援しています。

（片桐　記）

昭島荘　道句会

伸し餅を
切る兄さんの　顔の笑み
河内　通子

雪達磨
小中大の　三個あり
河内　通子

雪達磨
遠き古里　思い出し
加賀屋美知子

母と子の
喜び繋ぐ　年賀状
加賀屋美知子

雪達磨
転がし作る　楽しさよ
冬帽子
被りて学校　行く私
神　きぬ子

故郷の
初雪積もり　雪達磨
朝マスク
背筋寒いや　冬の夜
金田　榮子

昭和郷高齢者複合施設建設について

昭和郷高齢者複合施設　準備室
前田千紗子

昭和郷第二保育園跡地に、平成二十九年五月の開設を目指し、介護保険サービス四事業と高齢者向け住宅を併設する「昭和郷高齢者複合施設」を建設しています。

当法人が昭和四十八年より運営するライトホームは、開設から四十三年が経過し老朽化と耐震基準の問題を抱え、利用者が安全に暮らせる移転先としてサービス付き高齢者向け住宅「さくらガーデン」の建設に至りました。

また、昭島市の第六期介護保険事業計画においても地域に密着したサービスの整備が喫緊の課題となっています。中でも併設を予定している①定期巡回・随時対応型訪問介護看護事業②小規模多機能型居宅介護事業は、昭島市内では初めての事業所となります。地域包括ケアシステムを支える複合施設として現在建設を進めています。

定期巡回・随時対応型訪問介護看護事業では、一日に複数回の定期的な訪問と、緊急呼び出しによる対応や訪問を行い、在宅で暮らす高齢者が住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けられるよう二十四時間の柔軟なサービスを行います。当法人としても初のサービスとなります。小規模多機能型居宅介護事業と共に、地域の実情に合った多様なニーズに応える施設づくりを目指していきたいと考えています。

また、複合施設の建物内には、施設利用者だけでなく地域の方にも広く利用していただける地域交流スペースを確保します。防災設備も整え、災害時には地域の方の避難場所としても利用していただくことも想定しています。

地域との連携の中で、超高齢社会の現状に沿うサービスを展開し、昭和郷高齢者複合施設が地域を支える拠点となれるよう努力してまいります。

リスクへの対策・意識向上に向けて

リスクマネジメント委員会
荒井　隆夫

今年度のリスクマネジメント委員会では、各施設が健全かつ安全な運営が行なえるよう、活動目的・内容を確認しながら取り組んできました。

活動内容としては、①システムの安全運用について②防災・減災・BCPの対策・充実に向けて③緊急時の連絡体制・新たな構築に向けて④公用車所有施設の安全対策についてなどを中心に、順次検討し、皆様のご協力を得ながら実施してきました。

特に公用車所有施設の安全対策としては、安全運転講習を実施し、更なるリスク軽減として、全公用車へのドライブレコーダーの設置を行いました。

また、個人情報や各施設の重要事項等の情報漏えい対策として、各施設長及び各施設のシステム担当者を対象に、二回に分けて研修を実施し、危機意識の向上と運用管理の安全性を図りました。

しかし、委員会としてもっとも中心に取り組む課題となったのは、昭和郷内にある他法人の運営する保育園への爆破予告や神奈川県の障害支援施設での殺傷事件、またそれに類似する事件などから、法人内での有事に対しての新たな緊急連絡体制の構築と、防犯対策・危機意識の向上となりました。

改めてリスクとは何かと調べると、予想とのぶれにより不測の結果が生じる可能性がある状態（危険）と書いてありました。

委員会としては、リスクアセスメントによって各施設においての危機・事故・トラブルなど、潜在的な危険性を見つけ出し、軽減・除去が出来るように、レスポンス良く取り組んでいきたいと考えております。

ご寄付

◇名久井佳治◇戸塚洋子◇山内悦◇森谷順蔵◇烏山文子◇昭島市自治会連合会第四ブロック　ブロック長　横田孝至◇昭島市自治会連合会第四ブロック　顧問　渕上良子◇昭島市自治会連合会第四ブロック　間正子◇昭島市民生委員　児童委員協議会　会長　皆川貞次郎◇昭島市老人クラブ中神仲よし会　会長　山田恒男◇都営中神第二団地自治会　会長　山田恒男◇富士見ヶ丘団地自治会　会長　本田伸児◇昭島サンセルフ　高野裕志◇酒井屋製菓　杉山功定◇橋本工務店　代表　橋本誠一◇(社福)東京リハビリ協会　理事長　緑川清美◇㈲メグミ生花店　代表取締役　浅野光憲◇昭島ガス㈱　代表取締役社長　平畑文興◇㈱共伸インテリア◇日清医療食品㈱東京支店◇ネオ・ハルト㈱　代表取締役　南浩一◇㈱三ツ矢◇㈱やまとモータース　代表取締役　石原康司◇手芸の店　トモヤ

後援会

◇槇島房子◇浅見理恵◇丸山真依◇ヘアパルおかもと◇高倉洋志◇佐々木みつる◇本田ふき子◇南雲栄一◇森川喜久男◇大西陽◇NPO法人ひだまり　深井葉子◇青木保之◇鮫島恭江◇高木基代乃◇中村健一◇高仲智子◇唯野信廣◇山内悦◇宮奈多摩江◇おしゃれ洋品店ウエノヤ◇昭島サンセルフ　高野裕志◇㈱ワイズマン◇NPO法人日本幼児健康体育協会◇㈱コイヌマ◇㈲海老山◇㈱共伸インテリア◇㈱ハーティーマネージメント　代表取締役　阿部博人◇雪印メグミルク下坪牛乳販売店◇㈱ミートショップの鈴政◇横田屋米店◇㈱ケイエス機材◇大山町町会　会長　松野榮仁◇吉村電気工事㈱◇昭和の森エリアサービス㈱スマイルケア昭和の森◇桑都ビル管理㈱◇唐澤電気㈱◇㈱コスモス医工◇戸山商事㈱◇㈱安江設計研究所　代表取締役　安江知之◇浦野工業㈱　浦野静夫◇シダックスフードサービス㈱◇㈲浜長水産　代表取締役　林長三郎◇㈲肉の大高◇㈱木の里工房木薫　代表取締役　國里哲也◇田所青果㈱　代表取締役　田所金治◇㈱豊明◇東京冷機工業㈱◇昭島ガス㈱◇㈱菊屋商店　代表取締役　宮崎貞夫◇㈱金祥堂紙販売　代表取締役　小仁所康之◇クリエーティブカミヤ㈱◇㈱昭和造園◇特定医療法人社団　愛有会　久米川病院◇ひかりのくに㈱東京営業所◇アーキベルク一級建築士事務所◇マツダドライサービス◇㈲いとう教材社

ご支援ありがとうございました。

（敬称略順不同）

※「同援だよりに名簿掲載希望欄」へ○印をご記入頂いた方のみ掲載しております。

バザーのお礼

今年度も法人各施設では、それぞれ趣向を凝らし盛況にバザーを開催することが出来ました。ボランティアの皆様には一日お手伝い頂き、厚く御礼申し上げます。

寄せられました皆様方のご厚情に対しましては各施設で有効に活用させていただき、今後共地域に必要とされる施設を目指して参ります。

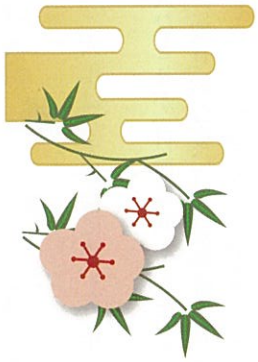
ありがとうございました。

東京消防庁感謝状

つつじが丘保育園

当園は毎年全職員救命救急講習を積極的に受け認定証を頂いています。

昨年九月九日の「救急の日」にちなみ、「日頃から救急の行政の推進に多大な貢献をされている」ということで、東京消防庁より感謝状を頂きました。



祝表彰・感謝状受賞者

多年の功績とご協力に対し、次の方々が表彰されました。おめでとうございます。

◎**東京都知事感謝状**

昭島荘　園長　池田　清彦
いこいの家　園長　福田　恭子

◎**全国社会福祉協議会会長表彰**

つつじが丘保育園　園長　上林　唱子
さいわい福祉センター　事務員　長利　浩文

◎**全国救護施設協議会会長表彰**

昭島荘　介護職員　浅沼　秀子

◎**日本保育協会永年勤続表彰**

つつじが丘保育園　保育士　髙橋富士子

◎**東京都社会福祉協議会会長表彰**

さくらんぼ　主任生活支援員　木村　泉

◎**東京都社会福祉協議会会長感謝状**

さくらんぼ　副主任生活支援員　濱野亜希子

資格取得の紹介

次の方々が資格取得しました。日頃の業務に生かしご活躍を期待します。

【介護支援専門員】

フジデイサービスセンター　介護職員　椿　英登
非常勤介護職員　田邉久美子
ゆたか苑　介護職員　今林　幸枝
介護職員　高橋　法子
ひかり苑　介護職員　中村　圭吾
ニューフジホーム　介護職員　長谷川修平

【保育士】

むさしの保育園　非常勤保育士　山本　春華

お詫び

夏号で掲載いたしました資格取得記事に誤りがありました。ここに訂正してお詫びいたします。

さいわい福祉センター　生活支援員
【正】本村　隆浩
【誤】木村　隆浩

補助事業完了のお知らせ

東村山生活実習所

「東京都共同募金会NHK歳末たすけあい」から補助金をいただき、「トヨタハイエース」を購入させていただきました。

利用者の送迎や外出等に利用させていただいております。

本当にありがとうございました。

雑感

二〇一六年はリオ五輪に沸いた一年でした。

一人ひとりが、目標に向かい努力し、競技に取り組む姿には皆が感動させられました。一つ一つのことを我が事のように喜び、悲しみました。次は東京五輪です。オリンピック開催までには様々な問題が残っていますが、みんなが協力して、素晴らしい東京五輪を開催できたらと思います。悲しい事件が続く社会の中で、スポーツを通して世界平和が広げられたらと思わずにいられません。

さて、お正月恒例の箱根駅伝。ひたむきに母校のたすきをつなげていく姿もまた感動です。一つのたすきにかける想い、共に協力し分かち合えることの大切さはかけがえのない宝です。新しい年の始まりに初心を思い起こし、新たな一歩を踏み出したいと思います。

（大堀　記）

―表紙の写真―

「本栖湖畔から観た富士山」

（南山　京子　氏）

平成二十九年一月四日　発行
東京都新宿区原町三の八
電　話　〇三（三三四一）七一六一
社会福祉法人（恩賜財団）東京都同胞援護会
発行者　牧野　洋一
印刷所　東京都同胞援護会事業局
東京都墨田区両国四―一―八